

Title	書評：浜日出夫著『戦後日本社会論：「六子」たちの戦後』有斐閣、2023年
Sub Title	
Author	渡辺, 秀樹(Watanabe, Hideki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2024
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.29 (2024. 7) ,p.147- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20240701-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

浜日出夫著『戦後日本社会論——「六子」たちの戦後』

有斐閣、2023年

渡辺 秀樹

熟達の社会学者が<自在>に、戦後日本社会を描いた書である。

映画『ALWAYS 三丁目の夕日』（山崎貴監督、2005年公開）で、堀北真希が演ずる六子を本書に登場させる。六子だけでなく、彼女の夫、その夫婦の間に生まれた二人の子ども、さらには長女が結婚した家族まで著者の創造物として登場させる。索引の人名で見ると、六子とその家族の出現頻度は圧倒的だ。実在で多いのは荻谷剛彦・見田宗介の各7回、落合恵美子・橋本健二の各5回、山田昌弘の4回だが、相手にならない。まさに六子の家族とともに議論は進む。（なお、これら索引人名の頻度の多い研究者群は戦後日本社会を論ずるに適切な選択のように評者は受け取っている。）

六子とその家族の設定によって、読者は、著者が描く戦後日本社会をより身近な現実として見るだろう。その意味で、著者の設定は成功している。さらに巧みなのは、六子自身が経験した家族や教育や仕事の有り様を日本型近代社会（戦後体制）への途上過程とその実現として位置付け、六子の子どもや孫たちの生活あるいは人生は<第二の近代社会（ポスト戦後体制）>へと変化する状況として、やはり身近に描いてみせていることだ。異なる世代のライフコースを重層的に交差させて対象を動かしながら立体的な議論となっている。戦後日本社会の変化が浮き上がるしくみだ。

もうひとつ、読者が身近に感じるような仕掛けが込められている。それは、著者の来歴や生活史がところどころに顔をだすのである。戦後日本社会に自己を埋め込んで見せている。著者と読者との距離が縮まり、一緒に戦後日本社会を旅する気持ちが湧いてくる。著者と同世代、あるいは評者のように歳上（団塊の世代）であれば、自分はこうだったと、比較しながら読み進めることができる。また想定する読者のターゲットは学生（社会学の講義科目の教科書や参考書）と思われるが、学生は自分の親そして祖父母はどうだったろうかと思いを巡らし、実際に親や祖父母に聞いてみるという会話の呼び水にもなる。社会学の実践的学習にもつながるだろう。自分が生きる社会に敏感になり、家族が生きてきた社会に関心を持つことは社会学入門の入門であろう。

あるいは純粋に「浜日出夫」という社会学者の生い立ちを知りたい、というのも自然な欲求であり興味尽きないことではなかろうか。彼の人生の節々を見せてくれる。「浜日出夫」を生きる著者の、その基盤のほんの少しを手掛かりとして、さまざまに思いを巡らすことも楽しい作業だ。該当箇所のいくつかを紹介しておこう。

P16：父親のこと。P51：浜家にテレビがやってくるエピソード。P67：著者は自宅出産、弟さんは病院で産まれる。P91：祖父の住まいのつくりとその周辺風景。P97：著者の大学院時代の木賃アパート。

P101: 著者が高校生のとき住んだ2DKの社宅。圧巻はP124-5であろう。著者は転勤族の子どもであった。「僕は行かないよ」「僕一人でここに残る」というのは著者の生の声である。著者は「小中高それぞれ2校ずつ通った。」「高校2年生のときは、僕も「僕は行かないよ」「僕一人でここに残る」、と言った。しかし結局編入試験を受けて、転校した」。(そういえば、評者の高校同級生に、親の転勤について行こうとしたが、編入試験に受からず、ひとりで下宿して卒業までいた、ということがあった。)

本書の構成(目次)は以下の通り。「はじめに -「ALWAYS 三丁目の夕日」から「無縁社会」へ」、「第1章 集団就職の時代」、「第2章 テレビの時代」、「第3章 六子の結婚」、「第4章 高度経済成長期の社会: 1 家族の戦後体制、2 雇用の戦後体制、3 住宅の戦後体制」、「第5章 一億総中流社会 -安定成長期の社会」、「第6章 失われた三〇年」、「第7章 家族のポスト戦後体制 -第二の近代社会へ(その一)」、「第8章 雇用のポスト戦後体制 -第二の近代社会へ(その二): 1 雇用の変容、2 第二の近代家族 -直美の場合、3 ロストジェネレーション -誠の場合」(評者注: 直美は六子の長女として創作・誠は六子の長男として創作されている)、「第9章 地域の変容 -第二の近代社会へ(その三)」、「おわりに -第二の近代社会を生きる」、以上である。

文章は平易。読みやすい。わかりやすく、かつ要点をおさえた説明である。社会学とは何かをことさらに言明せずに、読者はいつの間にか社会学的なものの考え方(sociological way of thinking)に引き込まれ、馴染むような仕掛けになっている。難しい社会学の専門用語の登場は最小限にとどまる。読者は、難解な用語に遮られずに済む。記述の丁寧さは著者の一貫した特徴だ。ただ、評者には、冗長と思われる記述もあったことは事実だ。それは、統計図表の結果を百分率(%)で読み上げ、さらにそれを割合で言い換えるという文章だ。図表を見ればわかる、という感じがしないでもない。読者範囲として初学者を中心に想定しているからとも思われる。

気になる点をいくつか、率直に述べさせていただく。まず、p79の年齢階級別労働力率の説明だ。「 $\frac{\text{一五歳以上のすべての人口}}{\text{分母}}$ としており、 $\frac{\text{一五歳以上の五歳ごとにきざんだ年齢階級の人口}}{\text{分母}}$ とし、当該の年齢階級の労働力人口を分子とし、得られた値をつないだもの $\frac{\text{一五歳以上の五歳ごとにきざんだ年齢階級の人口}}{\text{分母}}$ 」などとする方が誤解は生じないだろう。また、p213の日経連と経団連とは、2002年以前は別団体であり、前者が後者に統合して、前者が消滅したという経緯がわかる説明がよいと思う。P225の注16は、ちょっと疑問。育児時間の増加の理由を専門の知見にあたって後に、このような文章が添えられてもよいのだろうが、。。

基本的に本書の注は、とくに前半において細部にこだわり、ときに蘊蓄が披露され楽しませてくれたことは間違いないのだが、。。

統計図表について、全体的に気になるのは、多くが(出所)資料からの<作成>となっていることだ。<作成>ということは引用ではなく、出所資料になんらかの変更を加えた、加工したということだ。もちろん、本書でよく用いられた人口動態統計や「人口統計資料集」などには、1ページ全体が数字で埋め尽くされて加工するしかない場合もある。しかし、専門書の図表が出所となる場合、すでに研究者が研究の目的に応じて<作成>している。それをさらに作成する(2次的加工)という場合、(見ればわかる場合を除いて)どのような加工をしたのか明示するのがよいと思う。これが無

いと原典ではどうなっているのか気になってしまう。加工するということは、分かりやすさは増すとしても情報量は必ず減じるということに常に留意したい。

ちなみに、出所のひとつの橋本健二『アンダークラス2030 -置き去りにされる「氷河期世代」』（毎日新聞出版、2020）と突き合わせてみた。本書の図8-14（p206）と橋本の図表1-1（p60-1）で見ると、図表は何の加工もされていない。挿入される短い説明文が異なるのみだ（これも橋本のp5の図表に出てくる）。<作成>という言葉の意味が違うらしい。しかし、これを<作成>というのだろうか。違和感を感じざるを得ない。また、本書の表8-2（p218）と橋本の図表5-2（p241）とは、まったく同一の表だ。表のタイトルを変えただけだ。これを<作成>というのだろうか。橋本の図表5-2の表下にある「出典：2017年就業構造基本調査より」を含めて<引用>とする方がよいと思うがどうだろうか。先行研究へのリスペクトの欠如にもつながり、一考をお願いしたい。

さて、社会学入門科目の教科書として本書を用いる場合、講義する立場ではどうするか。評者なら、随所に出てくるトピックやキーワードに足を止めて、社会学の知見を示す。学歴と職業の対応関係の変化なら教育社会学の研究成果を紹介し（評者の学生時代は、「学歴の職業ラダー下降現象」などという堅い言葉があったが、それはいらぬ）、教育と職業との間断の無い連結についての参考文献を示しながら、学生に議論を仕向ける。無限定的な働き方・限定的な働き方が出てきたら、ほかのパターン変数についても紹介し、社会学の分析枠組みの導入にする。「豊川信用金庫」（p111）が出てきたら、その経緯を詳しく調べてもらい、予言の自己成就の講義につなげる、学生たちが日常に接する事象のなかで、予言の自己成就の事例として説明をできるものをあげて議論を促す、家族の近代とポスト近代、などいろいろ膨らむ。「モダンタイムス」、「そして父になる」、「生きる」など、ときには映画鑑賞の時間も取りたい、。

学生として、本書を教科書として使うなら、まずは味読することだ。社会的なものを見方を楽しみながら自然に学ぶことになるだろう。もう少し意識的に使うとしたら卒論のテーマを探す、レポートのテーマを探すということだろう。本書はその宝庫と思われる。家族・教育・職業の問題、それらの関係、そしてコミュニティの問題。それぞれの変化の問題、近代とポスト近代の議論など豊かなヒントに満ちている。紹介されている文献を手掛かりに学習を進めることができるだろう。最初に述べたように索引に出てくる研究者とその著書・論文は手掛かりとして適切なものが多い。

最後に、本書の「刊行のお知らせ」（2023年11月）の文章を引用したい。本書を紹介するこれ以上の文章はないと思われる。

「戦後から現在までの日本社会の移り変わりを、映画『ALWAYS 三丁目の夕日』の主人公「六子」と、その家族のありえたかもしれない人生を足がかりに説明していきます。

家族・雇用・地域・階層など、社会学の基本的なものの見方を軸に、各時代の空気や特徴を感じながら要点を押さえ、図表を交えてわかりやすく解説しています。初学者が、戦後日本という大きな枠組みで社会的に考えられるよう、そして日本社会への理解を深められるよう誘います。」

（わたなべ ひでき 慶應義塾大学名誉教授）